

第4版まえがき

このたび本書『憲法とそれぞれの人権』第4版を出すにあたり、新たに4名が加わり執筆者は総勢10名となった。初版のときから本書をけん引してきた主力メンバーはそれぞれ勤務していた大学をめめたくも退職する年齢となり、それよりも1つか2つ下の世代、若い世代がその大半を受け継いだ。

本書は、権力によって不当に扱われた人々や、弱い立場にある人々、逆境にさらされた人々に寄り添う姿勢で貫かれている。そして、そのような人々の生身の具体的な人間としての生きざまに焦点を当てながら、私たち1人ひとりの現実の生活が決して憲法と無関係ではないことを示している。国の政治を動かす仕組みも、社会のあり方も、私たち1人ひとりの「それぞれの人権」と密接に関わっていることをより明らかにしたいという思いをもって、第4版は作られた。

この思いはコラムにも表れている。本書では初版以降コラムを置き、各章の内容を深く理解したり、発展的に学習したりするための素材を呈示してきたが、第3版までとは異なり、この第4版では現役の新聞記者がコラムを執筆した。生身の人間を追いやった国の行為や社会のあり方を鋭く衝く「新聞記者の眼」は、不当に扱われた人々や、弱い立場にある人々、逆境にさらされた人々に、どこまでも寄り添いあたたかい。「私も同じ立場になるかもしれない」、「私の近くにも同じような経験をしている人がいる」ということに気づき、ともに考える機会を提供する重要な役割も、コラムは担っている。

第4版では形式面での変更も加えた。旧版から執筆者が交代した章は新たに書き下ろすことを基本とした。また、各章の分量を均一化し少しでも読みやすくなるよう心がけ、今注目を集めているテーマを中心に新たな章を創設した。

この第4版においても、法律文化社から大きなご支援をいただいた。とくに編集部の舟木和久さんには、初版以来、本書のことをずっと気にかけていただき、「私からもいいですか?」で始まる指摘は、憲法だけでなく他の学問分野の編集にも携わってこられた経験と識見に裏づけられており、執筆者としては、それに数行で応えなければならないという苦行が待っていた。本書にきらりと光る箇所

第4版まえがき

があるとするば、それは舟木さんの指摘から始まり「現代憲法教育研究会」のメンバーで検討した成果である。同じく編集部の中木達也さんと二人三脚で本書の編集に当たっていただいた。お二方に感謝申し上げたい。

2022年 春

執筆者を代表して

寺川史朗